

取材のお願い

公益財団法人古川知足会
古川美術館分館 爲三郎記念館

装飾と造形の新たな世界

特別展

光彩の径 - みち - 加藤令吉展

2025.10.25 [SUT] - 12.21 [SUN]

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、日展にて活躍を続け中部陶芸界を牽引する・加藤令吉の大規模な個展「光彩の径－加藤令吉展」を爲三郎記念館（古川美術館分館）にて開催します。背戸窯の22代目として生まれた加藤令吉は、父・加藤鈔に若い頃より伝統技法を叩き込まれ、その基盤の中に現代の要素を取り入れて作風を展開させてきました。令吉作品の魅力は大迫力の造形と、金属質の装飾性、そして細部に宿る作家の痕跡です。加藤令吉の大学生の頃の未発表作品と近年の最新作を一堂に公開する本展を、是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

オープニングトーク
開催決定

10月25日（土）
11：00～

加藤令吉「煌射」2024年

加藤令吉陶芸の世界

背戸窯の二十二代目として生まれた加藤令吉は、父・鉢のもとで幼少より陶芸の手ほどきを受け、伝統技法を徹底的に叩き込まれました。その確かな基盤の上に、令吉氏は現代的な感性を重ね合わせ、独自の作風を築き上げてきました。彼の歩みには、常に斬新な視点と洗練された造形意識が息づいています。初期には、土そのものの力強さを象徴するような、大胆な造形の作品群を展開。やがて「融合しないものを融合させること」を主題に、鉄顔料を用いた器体に赤や金彩の幾何学文様を施す表現へと進化していきます。そこには、モダンで洗練された空気感が漂い、令吉氏の作品に新たな美の次元が加わりました。さらに近年では、多色による装飾から一転し、単色による幽玄な世界へと表現を深化させています。白を基調とした地に金彩を施すそのスタイルは、装飾と造形が一体となった静謐で崇高な美を湛え、観る者に深い余韻を残します。

本展では、伝統の技と陶魂に裏打ちされた、加藤令吉氏の自由で豪放な創造の軌跡をご紹介します。瀬戸赤津焼の精神を受け継ぎながら、常に新たな表現を切り拓いてきたその陶芸世界、まさに伝統と革新が響き合う現代陶芸の真髄をお楽しみいただけます。

日展特選への道のり



玉川大学卒業後、瀬戸に戻り、日展を中心に作家活動を展開します。1975年、22歳で初めて日展に応募し、初入選を果たしました。1985年の第17回日展では、《星河》（現・瀬戸市美術館所蔵）を出品し、初の特選を受賞します。この作品は、黒釉を用いたプリミティブな造形で、土の力強さを表現した意欲作。若手作家としての大胆な表現が高く評価されました。黒から蒼、そして白へと緩やかに移ろうグラデーションは、まるで炎の軌跡を描くように美しく、その中に星を思わせる装飾が施されています。彫刻紋の流れが片身に寄せられた構成は洒脱で、若き令吉の感性が光る作品です。日展において特選は、短期間で二度受賞することが理想とされる中、令吉が二度目の特選を受賞したのは1997年の第29回日展。初受賞から10年以上の歳月を経ての快挙でした。《悠久》と題されたその作品は、鉄顔料を用いた器体に、赤や金彩による幾何学文様を施したもので、モダンで洗練された雰囲気を感じています。加藤氏の代表的なスタイルの確立を示す、記念碑的な作品といえるでしょう。（※作品は展覧会会場にてご覧いただけます）

陶土×金属

クリムトの世界観

加藤令吉が大学時代に強く惹かれた画家、グスタフ・クリムト。クリムトは金箔や装飾的なパターンを駆使し、絵画に独特の質感と輝きをもたらしたことで知られています。その作品は、視覚的な豪華さと触感的な印象を同時に追求し、ウィーン芸術に“黄金の時代”を築き上げました。令吉は、こうした素材へのこだわり深く共感し、クリムトの表現を自身の作品に反映させたいと強く願いました。特に、クリムトが女性像を通して描いた「生と死」「愛と官能」「精神と肉体」といった人間の根源的なテーマに心を動かされ、人間の存在や精神性を造形によって表現しようと試みます。その探求の中で生まれたのが、陶と金属を融合させた独自の世界です。素材の持つ力と精神性が交差するその作品群は、加藤令吉の代名詞ともいえる存在となり、今もなお多くの鑑賞者を魅了し続けています。



陶芸家・加藤令吉

1953年、加藤令吉は陶芸家・加藤鈔の長男として瀬戸市に生まれました。令吉が継承する「背戸窯」は、慶長年間（17世紀初頭）に創業し、450年以上の歴史を誇る由緒ある窯元です。加藤家は代々この窯を守り、瀬戸焼・赤津焼の伝統に、時代の感性を融合させてきました。

幼少期から陶芸に親しんできた令吉は、1976年に玉川大学へ進学しました。しかし、芸術大学で本格的に陶芸を学びたいという思いが芽生え、父・鈔に相談します。鈔は「どんな環境でも満足できない者は、どこへ行っても成功しない」と檄を飛ばし、令吉を奮い立たせました。

その言葉を胸に、令吉は大学生活を通して自身の表現と芸術性を深く探求しました。瀬戸を離れたことで、外から瀬戸という陶芸の町を冷静に見つめる時間を得ることができました。こうして育まれた先見の明は、瀬戸に戻り陶芸家として歩み始めた令吉にとって、何よりの武器となりました。

瀬戸での作陶は、地元特有の土や風土、釉薬づくりなど、大学で培った知識とは異なる世界であり、一から学び直す日々

でした。当時の瀬戸は、日展を中心に活躍する作家を多く輩出しており、令吉もその舞台を選びました。初期には黒釉を用いたプリミティブな造形の作品で、若くして日展で特選を受賞しました。その後も令吉氏は表現の幅を広げ、陶をベースに金属的な質感を追求する作品へと挑戦を重ねました。それは、大学時代から傾倒していた画家・クリムトの表現への憧れに根ざしていました。この挑戦は、令吉氏の陶芸に華やかさと荘厳さをもたらし、やがて彼の代名詞とも言えるスタイルが確立されました。

現在では、安定したフォルムに華やかさ、時には儚さをも感じさせる作品を多く手がけ、陶芸の可能性を追求し続けています。瀬戸赤津焼の「背戸窯」の伝統を継承しつつ、祖父・父の代から続く精神を受け継ぎながらも、現代的な造形や色彩感覚を取り入れ、現代アートとしての陶芸を追求する加藤令吉。その歩みは、瀬戸の陶芸界を牽引する存在として、今なお進化を続けています。



大学時代の未発表作 ～源流を辿る

この作品は、加藤令吉が大学生の頃に制作したものです。令吉が入学した玉川大学文学部芸術学科は、1964年4月に新設されたばかりの学科でした。この年は東京オリンピックが開催され、日本が文化的にも国際的にも注目を集めた時期でもあります。そうした時代背景の中で、グローバルな視点を持つ教育環境は、令吉の芸術的な感性を育むうえで理想的だったといえるでしょう。令吉は、自身の感性が国際的な芸術家たちに共鳴していることを直感的に感じていました。特に彫刻家ジャコメッティや画家クリムトの作品に強く惹かれ、深い関心を寄せていました。本作には、陶土を用いた彫刻的な現代表現が見られ、ジャコメッティの原始的な造形を思わせる要素が感じられます。また、土の質感を活かしたテクスチャの仕上げには、陶芸家としての令吉の資質が表れています。手遊びの延長のようにも見える自由な造形からは、若き令吉が何ものにも縛られず、のびのびと創作に向き合っていた様子が伝わってきます。



多色の装飾世界

黒を基調としたモダンな作風から一転し、多色の装飾が際立つ本作には、令吉の内面の変化と再生の力が込められています。

中央に施された青・黒・黄の波紋のような装飾は、静かな緑の地肌と対比をなし、動と静、混沌と秩序の共存を感じさせます。色彩の選択と構成には、令吉が長年培ってきた美意識と、新たな感性が表れています。緑の階調が織りなす静かで奥深い風景が表出された本作は、作者の多色装飾の世界を象徴する重要な作品群のひとつです。



本展ビジュアルデザイン 「煌射」

2024 年度の日展に出品された本作は、これまで加藤令吉が手がけてきた黒を基調としたモダンな作品とは一線を画し、幻想的な作風で制作されました。令吉がこの転換点を迎えた背景には、2020 年から世界を揺るがしたコロナウイルスの存在があります。未知の脅威に直面した令吉は、心の浄化と祈りを込めた表現を模索し、白・金・銀を用いた荘厳な世界観へとたどり着きました。

加藤令吉「煌射」2024 年 日展出品作



展覧会情報

名 称 爲三郎記念館特別展「光彩の径 加藤令吉展」

日 時 2025 年 10 月 25 日（土）～ 12 月 21 日（日）10：00 - 17：00

休館日 月曜日（但し、月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日に休館）

主 催 公益財団法人 古川知足会

後 援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 瀬戸市 瀬戸市教育委員会
公益財団法人瀬戸市文化振興財団 瀬戸文化協会
中日新聞社 CBC テレビ 東海テレビ テレビ愛知 スターキャット株式会社

入館料 ①古川美術館と分館爲三郎記念館の共通券 一般：1,200 円 高大生：500 円

②美術館単館券 900 円

③記念館単館券 600 円

※①～③にかかわらず中学生以下は無料 ※②、③は年齢区分なし

作家来館日 アーティストトーク 10 月 26 日（土）・11 月 29 日（土）各日 11：00 ～（30 分）

茶会開催日 11 月 14 日（金）11 月 16 日（日）※作家によるおもてなし

お問い合わせ

公益財団法人 古川知足会 古川美術館分館爲三郎記念館 学芸課 052-763-1991

名古屋市千種区池下町 2-50

担当学芸員：林 奈美恵 mail: n_hayashi@furukawa-museum.or.jp